

彙 報

会 長 梶 茂 樹

——常任委員会——

2014 年度第 1 回常任委員会

日 時：2014 年 5 月 11 日(日)11:00～17:00

場 所：日本言語学会事務支局（中西印刷学会フォーラム）

出席者：梶 茂樹(会長)、荻野綱男、小林正人、定延利之、田野村忠温、新田哲夫、町田健、米田信子（以上常任委員）、吉田和彦（事務局長）

オブザーバー：林 徹（編集委員長）、芝垣亮介（大会運営委員）、鈴木孝明（広報委員長）、加藤重広（夏期講座委員長）、内藤真帆、森 若葉（以上事務局委員）

[報告事項]

- (1) 現在の組織・役員について
 - ・現在の組織・役員について確認がなされた。
- (2) 今後の大会開催予定について
 - ・以下の予定が報告された。
 - 第 148 回大会（2014 年春季大会）：2014 年 6 月 7～8 日，法政大学（大会実行委員長：間宮厚司氏）
 - 第 149 回大会（2014 年秋季大会）：2014 年 11 月 15～16 日，愛媛大学（大会実行委員長：塚本秀樹氏）
 - 第 150 回大会（2015 年春季大会）：2015 年 6 月 20～21 日，大東文化大学（大会実行委員長：福盛貴弘氏）
 - 第 151 回大会（2015 年秋季大会）：2015 年 11 月（予定），名古屋大学（大会実行委員長：佐久間淳一氏）
- (3) 2013 年度科学研究費研究成果公開促進費について
 - ・収支簿および実績報告書について，領収書並びに支払い記録等，関係証票書類に基づき監査の結果，適正に処理されていたという報告が経理担当者定延利之氏に

よってなされた。

- (4) 2014 年度科学研究費研究成果公開促進費について
 - ・「国際学術ネットワークの強化と電子的情報発信の強化のための組織的取組」という申請課題に対して，2014 年度の交付予定額が 3,800,000 円であることが報告された。なおこの事業を行うにあたり，『言語研究』146 号，147 号の出版（直接出版費に限る）に係る入札のスケジュールについて説明がなされた。
- (5) 各種委員会からの報告
 - ・彙報の各委員会の項目を参照。
- (6) 言語系学会連合からの報告
 - ・2014 年度は大庭幸男氏（日本英語学会）が運営委員長を務め，日本英語学会が事務局を担当すること，ならびに第 1 回運営委員会が 2014 年 5 月 24 日に関西外国語大学で開催されるという報告がなされた。
- (7) 言語系学会連合の運営委員の選考について
 - ・窪崎晴夫氏の任期が 2014 年 3 月 31 日に満了したが，2014 年度も言語系学会連合運営委員を継続するという報告があった。
- (8) 日本言語学会大会発表賞の選考結果について
 - ・大会発表賞選考小委員会からの推薦に基づいて，第 147 回大会（2013 年 11 月）における大会発表賞が以下のように決定したことが会長より報告された。
 - カフラマン バルシュ氏（共同発表者：オズベッキ アイダウン氏）「トルコ語における再帰代名詞の解釈に関する一考察」
 - 小林由紀氏（共同発表者：杉岡洋子氏，伊藤たかね氏）「規則適用としての連濁：事象関連電位計測実験の結果から」
 - 松井真雪氏「対立が“不完全に”中和した語の音声知覚：ロシア語の語末無声化の事例」
- (9) 日本言語学会論文賞選考小委員会委員の選考について
 - ・2014 年度の論文賞選考小委員 6 名につ

いて会長から報告があった。

- (10) 日本言語学会大会発表賞選考小委員会委員の選考について
- ・2014年度の大会発表賞選考小委員4名について会長から報告があった。
- (11) その他
- ・日本言語学会の税務対策として2014年1月1日から源泉徴収業務を開始したという報告があった。
 - ・第147回大会における剽窃による発表について、その後の経緯について報告があった。

[審議事項]

- (1) 言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクトについて
- ・松岡和美氏から申請のあった「ろう者と聴者が協働する手話言語学ワークショップ」の採択を決定した。
- (2) 東日本大震災の被災会員に対する会費免除について
- ・前年度に引き続き、会費免除措置を継続することが承認された。
- (3) 2015年度科学研究費補助金研究成果公開促進費（国際情報発信強化）の応募について
- ・2015年度以降の計画調書の内容について審議し、『言語研究』掲載論文を刊行と同時に無料公開し、自由に利用できるオープンアクセスの取組を含めることが了承された。
- (4) 2013年度決算について
- ・学会事務支局によって作成された2013年度決算について検討を行った。
- (5) 2014年度予算について
- ・2014年度予算について審議し、常任委員会原案を作成した。
- (6) その他
- ・オンライン会員情報管理システムについて学会事務支局の糸魚川共子氏から説明があり、審議の結果、導入を6月7日の評議員会ではかることが了承された。

——評議員会——

2014年度第1回評議員会

日時：6月7日（土）10:30～12:30

場所：法政大学市ヶ谷キャンパス 58年館5階856教室

出席者：梶 茂樹(会長)、加藤重広、佐々木冠、小野尚之、小泉政利、後藤 斉、伊藤たかね、井上史雄、上野善道、大堀壽夫、尾上圭介、影山太郎、風間伸次郎、菊地康人、窪菌晴夫、砂川有里子、滝浦真人、長谷川信子、林 徹、早津恵美子、峰岸真琴、呉人 恵、佐久間淳一、清水克正、玉岡賀津雄、堀江 薫、町田 健、定延利之、佐藤昭裕、沈 力、田窪行則、野田尚史、藤代 節、吉田和彦、吉田豊、桐生和幸、酒井 弘、塚本秀樹、和田 学、青木博史、上山あゆみ、江口正、久保智之（以上評議員42名）

委任状：16名

オブザーバー：井上 優、金水 敏（以上会計監査委員）、間宮厚司（大会実行委員長）、鈴木孝明（広報委員長）、内藤真帆、森 若葉（以上事務局委員）

議事に先立ち、会長より開催校である法政大学に対する謝意が表された。また11月13日に逝去された坂本比奈子氏、1月20日に逝去された奈良毅氏、3月23日に逝去された庄垣内正弘氏のご冥福をお祈りし、黙祷が行われた。

[報告事項]

- (1) 現在の役員・組織・任期について
- ・現在の組織・役員・任期が資料によって確認された。
- (2) 今後の大会開催予定について
- ・以下の予定が報告された。
- 第149回大会（2014年秋季大会）：2014年11月15～16日、愛媛大学（大会実行委員長：塚本秀樹氏）
- 第150回大会（2015年春季大会）：2015年6月20～21日、大東文化大学（大

- 会実行委員長：福盛貴弘氏)
- 第151回大会(2015年秋季大会)：2015年11月(予定)、名古屋大学(大会実行委員長：佐久間淳一氏)
- ・第148回大会の開催校を代表して間宮厚司大会実行委員長から挨拶があった。
 - ・第149回大会の開催校を代表して塚本秀樹次期大会実行委員長から挨拶があった。
- (3) 2013年度科学研究費研究成果公開促進費について
- ・2013年度科学研究費研究成果公開促進費(交付額340万円)について、経理担当の常任委員である定延利之氏から、監査の結果、適正に処理されていたことが報告された。
- (4) 2014年度科学研究費研究成果公開促進費について
- ・2014年度科学研究費研究成果公開促進費について、国際情報発信強化(B)という種目に「国際学術ネットワークの強化と電子的情報発信の持続的展開のための組織的取組」という課題で申請したところ、380万円が単年度で認められたという報告がなされた。なお、『言語研究』146号、147号の出版契約を中西印刷と結んだことも報告された。
- (5) 各種委員会報告
- ・本彙報の各委員会の項目を参照。
- (6) 言語系学会連合からの報告
- 言語学会選出の運営委員である窪菌晴夫氏から、現在の運営体制ならびに2013年度の活動報告と2014年度の事業計画などについて報告があった。
- ・2014年度は大庭幸男氏(日本英語学会)が委員長を務め、日本言語学会からは窪菌晴夫氏が運営委員、小林正人氏が監査委員を担当する。
 - ・2013年度は「UALSことばカフェ」の開催が主な事業であったが、2014年度はそれに加えて言語教育に関する公開特別シンポジウムを11月の日本英語学会大会開催時に行なう予定である。
- (7) 言語系学会連合運営委員の選考について
- ・2013年度に引き続き、2014年度も窪菌晴夫氏に言語系学会連合運営委員を継続することになったという報告があった。
- (8) 日本言語学会大会発表賞の選考結果について
- ・大会発表賞選考小委員会からの推薦に基づいて、第147回大会(2013年秋季大会)の研究発表について、選考結果が報告された。
- カフラマン バルシュ氏(共同発表者：オズベッキ アイドゥン氏)「トルコ語における再帰代名詞の解釈に関する一考察」
- 小林由紀氏(共同発表者：杉岡洋子氏、伊藤たかね氏)「規則適用としての連濁：事象関連電位計測実験の結果から」
- 松井真雪氏「対立が“不完全に”中和した語の音声知覚：ロシア語の語末無声化の事例」
- (9) 日本言語学会論文賞選考小委員会委員の選考について
- ・2014年度の論文賞選考小委員6名の選考結果が報告された。
- (10) 日本言語学会大会発表賞選考小委員会委員の選考について
- ・2014年度の大会発表賞選考小委員4名の選考結果が報告された。
- (11) 言語の多様性に関する啓蒙・教育プロジェクトの選考結果について
- ・松岡和美氏から申請のあった「ろう者と聴者が協働する手話言語学ワークショップ」というプロジェクトを採択する旨の報告があった。
- (12) その他
- ・2013年12月に日本言語学会と税理士とのあいだで業務契約を結び、本年より源泉徴収業務を開始したこと、ならびに具体的な税務対策について報告がなされた。
 - ・第147回大会において剽窃行為を行なった会員について、その勤務先から問い合わせがあり、勤務先においても調査委員会が設置されたという報告がなされた。
 - ・第148回大会においてノートテイキングを希望する会員に対して、学会として対応することが報告された。

[審議事項]

- (1) 東日本大震災の被災会員に対する会費免除について
 - ・東日本大震災により被害を受けられた会員について、前年度に引き続き2014年度の会費を免除することについてはかられ、承認された。
- (2) 2015年度科学研究費補助金研究成果公開促進費（国際情報発信強化）の応募について
 - ・本年秋に提出する来年度以降の申請内容について、国際情報発信をより一層強化するために、『言語研究』の掲載論文等を刊行と同時にオープンアクセスにすることについてはかられ、承認された。
- (3) オンライン会員情報管理システムについて
 - ・利便性の高いオンライン会員情報管理システムを導入することについてはかられ、承認された。
- (4) 2013年度決算について
 - ・2013年度決算案について、井上優会計監査委員より適正との報告があり承認された。【別表1参照】
- (5) 2014年度予算について
 - ・2014年度予算案について説明がなされた後、承認された。【別表2参照】

——編集委員会——

2013年度第2回編集委員会

日時：2014年3月27日(木)13:45～17:00
 場所：九州大学（箱崎キャンパス）文学部4階文学部会議室

出席者：上山あゆみ、久保智之、小森淳子、富岡 諭（特別編集委員）、西村義樹、林 徹（委員長）、Timothy J. Vance、吉田 豊、梅谷博之（委員長補佐・オブザーバー）

[報告事項]

- (1) 145号の内容について報告された。
- (2) 146号（特集「アジア・アフリカの手話」）への投稿状況、および、編集作業の進捗

状況が報告された。また、故庄垣内正弘顧問の追悼文を146号に掲載する旨、報告があった。

- (3) 国際情報発信強化科研費に関連した下記の2件についての報告があった。
 - ・第147回大会（神戸市外国語大学）での編集委員会企画シンポジウム“Current Issues in Sign Language Studies”
 - ・2014年3月24日に九州大学で開催された富岡諭氏の講演会

[審議事項]

- (1) 執筆要項の改訂について審議し、原案をまとめた。主な検討事項は次の通り。
 - ・第3項b：分量の指定の方法
 - ・第4項：日本語のローマ字化の方法
 - ・第5項：日本文の1語に対して2語以上のグロスを付す際の表記法
 - ・第6項a：参照文献欄に複数の言語による文献を混在させる際の示し方
 - ・第6項f：複数の著者を列記する際の表記法
 - ・第6項g：[研究発表]と[ウェブサイト]の示し方の追加
 - ・末尾の実例集：例の修正・追加
 なお、この原案は2014年度第1回常任委員会、および、2014年度第1回評議員会での審議・報告を経て、修正・承認された。【別記参照】

- (2) 査読者に送付する査読報告用紙の様式について検討した。
- (3) どのような場合に第3査読者を立てるかについて、編集委員会内の申し合わせを定めた。
- (4) 二重投稿に相当するかどうかの判断を一貫させるため、申し合わせを定めた。
- (5) 『言語研究』への投稿者が会員資格を有するかどうかの確認を、どの段階で行なうかを委員の間で確認した。
- (6) 2014年度の日本言語学会論文賞小委員会委員候補者を選出した。
- (7) 特別編集委員の富岡諭氏を中心に国際情報発信強化についての懇談を行ない、下記の項目について討議した。

- ・『言語研究』専用のウェブサイトの開設
- ・「掲載論文数」と「雑誌の注目度」との関係について（多様な分野の論文が掲載されるほうが読者の注目が集まる）
- ・和文論文に対する海外からの関心
- ・刊行媒体の種類
- ・査読者への謝礼
- ・海外の学会誌との連携の可能性
- ・海外からの投稿を増やす方策

——大会運営委員会——

2014年度第1回大会運営委員会

日 時：2014年4月5日(土)11:00～16:00
場 所：法政大学市ヶ谷キャンパス ポアソ
ナードタワー 25階C会議室

出席者：青木博史（大会運営委員長）、小野
寺典子、佐久間淳一、佐々木冠、芝垣亮介、
千田俊太郎、張 麟声、塚本秀樹、本間
猛、宮本陽一、渡辺 己（以上、大会運
営委員）、間宮厚司（大会実行委員長）、
石川 潔、尾谷昌則、椎名美智（以上、
大会実行委員）

[報告事項]

- (1) 第147回大会（神戸市外国語大学）の反省点、および第148回大会（法政大学）の準備状況が報告された。

[審議事項]

- (1) 第148回大会における研究発表の採否について審議した。応募要旨の審査結果に基づき、口頭発表56件（応募78件）、ポスター発表2件（応募2件）、ワークショップ4件（応募6件）を採択することとした。
- (2) プログラムの編成を行った。口頭発表は8会場×7本（移動10分）とし、各発表の振り分け、会場担当の委員ならびに司会者候補を決定した。
- (3) 予稿集の形式について検討した。将来的に紙媒体から電子媒体へ移行することも視野に入れ、従来の紙媒体に加え、PDFファイルを併せて提出する案につ

いて検討した。

[会場視察および打合せ]

- (1) 大会実行委員より説明を受け、会場予定の学舎、講義室などを見学した。シンポジウム・ワークショップ・口頭発表・ポスター発表会場、受付、書店展示、保育室、休憩室、懇親会などの各種会場の設営・運営の準備状況について確認、検討を行った。

[その他]

- (1) 2014年度日本言語学会大会発表賞選考小委員会委員について、大会運営委員会からの候補者を選出し、会長に推薦した。

——広報委員会——

- ・英語版ホームページ改善の一環として、『言語研究』の目次ページの英語化を進めた。
- ・ホームページで公開されている『言語研究』の論文の一部にリンク切れがあることがわかり、この修復作業を行った。
- ・『言語研究』に掲載されている論文の公開は、今後すべてJ-STAGEを通して行うこととし、そのための作業を開始した。作業完了までには、3ヶ月から半年ほどかかる予定である。
- ・『言語研究』第145号の刊行にともなって、目次と論文要旨のホームページを更新するとともに、刊行より1年を経過した号に掲載された論文の全文をホームページからダウンロードできるように作業を進めた。
- ・学会関連情報（第148回大会に関連する情報、大会発表賞、公募情報、研究会情報など）を逐次学会ホームページに掲載した。

——夏期講座委員会——

2014年度第1回夏期講座委員会

日 時：2014年6月6日(金)14:00～16:40
場 所：東京大学文学部言語学演習室
出席者：加藤重広（委員長）、小野 創、
佐久間淳一、下地理則、西村義樹、宮本

陽一

- (1) 今年度より新しい受講者登録システムが稼働し、今後このシステムを利用する旨、委員長から説明があった。
- (2) 講師謝金等に関する新しい申し合わせの確定と委員の夏期講座参加に関する申し合わせの修正について委員長より報告があった。
- (3) 夏期講座 2014 の開催準備に特に大きな支障がない旨、佐久間実行委員長から報告があった。
- (4) 夏期講座 2016 は、宮本陽一委員（大阪大学）を実行委員長に、近畿地区で開催準備を進めることになった。
- (5) 夏期講座 2014 には、夏期講座委員として、加藤委員（委員長）、西村委員（前実行委員長）、宮本委員（次期実行委員長）が参加することになった。

——小委員会——

大会発表賞選考小委員会

- ・2014年5月9日（金）に東京大学駒場キャンパスにおいて2014年度第1回の会合を開き、第148回大会（法政大学）での大会発表賞の審査基準・審査方法を確認し、審査対象となる研究発表と審査手順を決定した。
- ・2014年7月7日（月）に東京大学駒場キャンパスにおいて2014年度第2回の会合を開き、第148回大会（法政大学）での大会

発表賞の受賞候補となる研究発表を選考した。また、授賞理由の原案を作成した。その結果を7月14日に会長へ報告した。

——事務局——

2013年度会計監査

日時：2014年5月9日（金）15:00～17:00
 場所：日本言語学会事務支局（中西印刷学会フォーラム）
 出席者：井上 優、金水 敏（以上会計監査委員）、梶 茂樹（会長）、吉田和彦（事務局長）、糸魚川共子（事務支局）

井上優、金水敏両委員により2013年度決算書と関係書類について監査が実施された。

2013年度科学研究費研究成果公開促進費の監査

2013年度科学研究費研究成果公開促進費の監査が、常任委員の経理担当者である定延利之氏により実施され、適正との報告があった（2014年5月4日（日）、神戸大学）。

『言語研究』144号掲載の彙報に関する訂正
 『言語研究』144号の175頁に示されている別表2に関して、以下のとおり訂正する。
 ・支出の予備費 1,277,602 → 1,547,602、支出合計 27,031,602 → 27,301,602、合計 27,031,602 → 27,301,602。

【別表 1】2013 年度日本語学会決算

自 2013 年 4 月 至 2014 年 3 月

(単位：円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
会 費	13,072,500	刊 行 費	3,717,525
雑 誌 売 上	1,199,300	発 送 費	438,088
科学研究費補助金	3,400,000	事 務 委 託 費	4,284,000
科学研究費補助金利息	282	大 会 関 係 費	3,670,717
預 金 金 利	2,139	評 議 員 会 費	165,230
大会関係収入	1,747,500	常 任 委 員 会 費	550,690
基金から繰入	3,422,418	編 集 委 員 会 費	2,134,415
		大会運営委員会費	843,224
		広 報 委 員 会 費	179,820
		夏 期 講 座 委 員 会 費	85,920
		事 務 局 費	725,740
		学 会 賞 費	147,740
		多様性プロジェクト(公募型)費	0
		夏 期 講 座 経 費	0
		言 語 系 学 会 連 合 費	54,000
		C I P L 負 担 金	120,000
		CIPL 言語学文献一覽編集補助費	117,600
		通 信 費	540,488
		消 耗 品 費	213,978
		雑 費	21,000
		名 簿 作 成 費	0
		選 挙 関 係 費	0
		学 会 賞 小 委 員 会 費	277,320
		予 備 費	40,646
		(基金への繰入)	
		名 簿 作 成 積 立 金	800,000
		選 挙 関 係 積 立 金	300,000
		多様性プロジェクト(公募型)積立金	0
		夏 期 講 座 積 立 金	500,000
		京都銀行定期(過年度分預け替え)	3,400,000
収 入 合 計	22,844,139	支 出 合 計	23,328,141
前 期 繰 越 金	8,799,602	次 期 繰 越 金	8,315,600
計	31,643,741	計	31,643,741

◇収入内訳（単位：円）

会費

国内通常会員	11,548,500
国内維持会員	100,000
国内学生会員	648,000
国内団体会員	581,000
国内賛助会員	30,000
在外通常会員	161,000
在外学生会員	4,000

合 計	13,072,500
-----	------------

雑誌売上

書店販売	1,171,300
松香堂書店（取り次ぎ業務委託）	913,000
丸善	189,000
その他書店	69,300
事務局販売	28,000

合 計	1,199,300
-----	-----------

科学研究費補助金	3,400,000
----------	-----------

科学研究費補助金利息	282
------------	-----

預金金利	2,139
------	-------

大会関係収入

大会出店料	185,000
146 回大会 1 スペース 1 日（1 社）	5,000
1 スペース 2 日（4 社）	40,000
2 スペース 2 日（1 社）	20,000
147 回大会 1 スペース 2 日（8 社）	80,000
2 スペース 2 日（2 社）	40,000
予稿集売上	1,554,000
146 回大会時売上	610,000
147 回大会時売上	894,000
事務局売上（バックナンバー）	50,000
託児関係収入	8,500

合 計	1,747,500
-----	-----------

基金からの繰入	3,422,418
---------	-----------

※京都銀行定期（預金番号 002）に、一括して積み立てていた、2004 年度記念大会積立金 1,000,000 円、2004 年度夏期講座積立金 1,400,000 円、2004 年度 e- ジャーナル積立金 1,000,000 円を、名目別に預け直した。

◇支出内訳（単位：円）

刊行費		印刷部数	各号共に 2,300 部
内 訳	144 号 (204 p.)	145 号 (184 p.)	計 (388 p.)
印刷費	1,946,700	1,738,800	3,685,500
抜刷代	17,010	15,015	32,025
合 計	1,963,710	1,753,815	3,717,525

※割付・校正料は印刷費に含む。

発送費

『言語研究』一斉発送料	144 号	202,720
	145 号	235,368
合 計		438,088

事務委託費

4,284,000

2013 年 4 月分～2014 年 3 月分

日本語学会と中西印刷株式会社により交わされた事務委託内容の覚書に基づく業務の代金

大会関係費

内 訳	第 146 回	第 147 回	計
プログラム印刷費	105,000	105,000	210,000
ポスター印刷費	109,200	109,200	218,400
予稿集印刷費	819,000	1,092,000	1,911,000
その他印刷費 / 備品	29,400	29,400	58,800
大会関係発送費	181,029	180,526	361,555
大会費	177,381	417,391	594,772
講師謝金等	40,000	70,000	110,000
託児関係費	—	24,730	24,730
手話通訳謝礼	59,460	0	59,460
大会実行委員長経費補助	30,000	30,000	60,000
ノートテイキング補助	—	20,000	20,000
応募フォーム移行及び管理費	21,000	21,000	42,000
合 計	1,571,470	2,099,247	3,670,717

※ポスター印刷費はポスターデザイン代を含む。

評議員会費

会議費（年 2 回） 165,230

常任委員会費

旅費（年2回）	498,940
会議費（年2回）	51,350
通信費（資料送付）	400

合 計	550,690
-----	---------

編集委員会費

旅費（年2回+出張校正等）	822,120
会議費（年2回）	27,655
英文校閲費	103,950
アルバイト費（編集補助）	480,000
通信費	40,000
手話通訳料（147大会WS）	156,000
研究者招聘旅費（147大会WS）	504,690

合 計	2,134,415
-----	-----------

大会運営委員会費

旅費（年2回）	782,420
会議費（年2回）	60,804

合 計	843,224
-----	---------

広報委員会費

旅費（打ち合わせ1回）	2,820
ホームページ保守管理費	105,000
webmaster 経費補助	72,000

合 計	179,820
-----	---------

夏期講座委員会費

旅費（年1回+実行委員会1回）	85,920
-----------------	--------

事務局費

旅費（会計監査, 出張費）	117,340
会議費	8,400
事務局長, 事務局委員活動費	600,000

合 計	725,740
-----	---------

学会賞費

論文賞副賞（1件）	50,000
発表賞副賞（8件）	80,000
旅費補助（3件）	17,740

合 計	147,740
-----	---------

多様性プロジェクト（公募型）費 0

夏期講座経費 0

言語系学会連合費

連合会費 50,000

連合会費出席時旅費 4,000

合 計 54,000

CIPL 負担金

2013 年度負担金 120,000

CIPL 言語学文献一覧編集補助費 117,600

通信費

切手購入、通常発送費 57,753

みずほ銀行ビジネス Web 使用料 25,200

会費請求・督促状送料 209,290

カード手数料・送金手数料・残高証明発行手数料 163,660

『言語研究』追加・抜刷・バックナンバー送料 47,613

大会関係送料（プログラム、ポスター以外） 36,972

その他（文科省提出書類発送等）送料 0

合 計 540,488

消耗品費

文房具購入費 13,797

振替用紙印刷費 65,099

封筒印刷費 135,082

合 計 213,978

雑費

ジフリくんバージョンアップ費用 21,000

名簿作成費 0

選挙関係費 0

学会賞小委員会費

旅費（年 4 回） 245,820

会議費（年 4 回） 31,500

合 計 277,320

予備費

CIPL 委員会登録費	35,396
法律相談料	5,250
<hr/>	
合 計	40,646

基金への繰入

名簿作成積立金	800,000
選挙関係積立金	300,000
夏期講座積立金	500,000
2004 年度記念大会積立金	1,000,000
2004 年度夏期講座積立金	1,400,000
2004 年度 e- ジャーナル積立金	1,000,000
<hr/>	
合 計	5,000,000

◇ 2013 年度決算 予算・実績対照表

収入

(単位：円)

科目	予算	実績	対予算差異
会 費	13,000,000	13,072,500	72,500
雑 誌 売 上	500,000	1,199,300	699,300
科学研究費補助金	3,400,000	3,400,000	0
科学研究費補助金利息	0	282	282
預 金 金 利	2,000	2,139	139
大会関係収入	1,600,000	1,747,500	147,500
基金からの繰入	0	3,422,418	3,422,418
収 入 合 計	18,502,000	22,844,139	4,342,139
前 期 繰 越 金	8,799,602	8,799,602	0
合 計	27,301,602	31,643,741	4,342,139

支出

(単位：円)

科目	予算	実績	対予算差異
刊 行 費	5,300,000	3,717,525	1,582,475
発 送 費	600,000	438,088	161,912
事 務 委 託 費	4,284,000	4,284,000	0
大会関係費	4,500,000	3,670,717	829,283
評 議 員 会 費	300,000	165,230	134,770
常 任 委 員 会 費	800,000	550,690	249,310
編 集 委 員 会 費	2,800,000	2,134,415	665,585
大会運営委員会費	900,000	843,224	56,776
広 報 委 員 会 費	700,000	179,820	520,180
夏期講座委員会費	200,000	85,920	114,080
事 務 局 費	1,000,000	725,740	274,260
学 会 賞 費	400,000	147,740	252,260
多様性プロジェクト(公募型)費	0	0	0
夏期講座経費	0	0	0
言語系学会連合費	150,000	54,000	96,000
C I P L 負 担 金	120,000	120,000	0
C I P L 言語学文献一覽編集補助費	200,000	117,600	82,400
通 信 費	700,000	540,488	159,512
消 耗 品 費	400,000	213,978	186,022
雑 費	100,000	21,000	79,000
名 簿 作 成 費	0	0	0
選 挙 関 係 費	0	0	0
学会賞小委員会費	700,000	277,320	422,680
予 備 費	1,547,602	40,646	1,506,956
(基金への繰入)			
名簿作成積立金	800,000	800,000	0
選挙関係積立金	300,000	300,000	0
多様性プロジェクト積立金	0	0	0
夏期講座積立金	500,000	500,000	0
京都銀行定期(過年度分預け直し)	0	3,400,000	△ 3,400,000
支 出 合 計	27,301,602	23,328,141	3,973,461
次 期 繰 越 金	0	8,315,600	△ 8,315,600
合 計	27,301,602	31,643,741	△ 4,342,139

◇資産勘定

2014年3月31日（単位：円）

借方	金額	貸方	金額
事務支局		前受会費	
現金	119,929	国内通常	129,000
みずほ銀行口座	3,308,265	国内学生	87,000
郵便振替口座	4,548,781	国内団体	0
科研費口座	0	在外個人	7,000
カード	0	在外学生	0
夏期講座委員会口座	315	前受購読料	170,100
未収金*	973,000	未払金**	235,368
		源泉税預り金	6,222
		次期繰越	8,315,600
計	8,950,290	計	8,950,290

* 未収金は当該年度内の収入の回収が間に合わなかった場合の科目。

2013年度決算の未収金の内訳は以下の通り。

内 訳	金 額
広告料（会員名簿）※ 2012年度未収金	60,000
雑誌売上（松香堂分）	913,000
合 計	973,000

** 未払金は当該年度内の支出が間に合わなかった場合の科目。

2013年度決算の未払金の内訳は以下の通り。

内 訳	金 額
『言語研究』第145号発送費	235,368
合 計	235,368

◇基金 決算

基金 損益計算書

(単位：円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
期首特別会計(前期繰越)	12,224,327	一般会計へ支出	3,422,418
一般会計から繰入	5,000,000		
定期預金金利	801		
収入合計	17,225,128	支出合計	3,422,418
		次期繰越金	13,802,710
計	17,225,128	計	17,225,128

基金 資産勘定

2014年3月31日 (単位：円)

借 方	金 額	貸 方	金 額
みずほ銀行定期預金口座	10,000,000	積立金	13,802,710
京都銀行定期預金口座	3,802,710		
計	13,802,710	計	13,802,710

○基金内訳(目的別)

2014年3月31日 (単位：円)

記念大会積立金	3,400,000
夏期講座積立金	3,700,000
危機言語プロジェクト積立金	702,710
e-ジャーナル積立金	2,500,000
言語学普及積立金	500,000
多様性プロジェクト(公募型)積立金	800,000
選挙関係積立金	600,000
名簿作成積立金	1,600,000
計	13,802,710

○基金内訳（銀行別）

2014年3月31日（単位：円）

銀行名	預かり番号	名目	金額
京都銀行	003	記念大会積立金	1,000,000
みずほ銀行	038	〃	1,200,000
みずほ銀行	028	〃	400,000
みずほ銀行	025	〃	400,000
みずほ銀行	021	〃	400,000
みずほ銀行	057	夏期講座積立金	500,000
みずほ銀行	053	〃	500,000
みずほ銀行	051	〃	700,000
みずほ銀行	035	〃	600,000
京都銀行	005	〃	1,400,000
みずほ銀行	039	危機言語プロジェクト積立金	300,000
京都銀行	001	〃	402,710
京都銀行	004	e-ジャーナル積立金	1,000,000
みずほ銀行	044	〃	500,000
みずほ銀行	037	〃	1,000,000
みずほ銀行	047	言語学普及積立金	500,000
みずほ銀行	052	多様性プロジェクト（公募型）積立金	500,000
みずほ銀行	050	〃	300,000
みずほ銀行	058	選挙関係積立金	300,000
みずほ銀行	055	〃	300,000
みずほ銀行	056	名簿作成積立金	800,000
みずほ銀行	054	〃	800,000
計			13,802,710

※京都銀行定期（預金番号 002）に、一括して積み立てていた
 2004年度記念大会積立金 1,000,000 円、
 2004年度夏期講座積立金 1,400,000 円、
 2004年度 e-ジャーナル積立金 1,000,000 円を、名目別に預け直した。

003	記念大会積立金	1,000,000
004	e-ジャーナル積立金	1,000,000
005	夏期講座積立金	1,400,000

【別表2】2014年度日本語学会予算

自 2014年4月 至 2015年3月

(単位：円)

収 入		支 出	
科 目	金 額	科 目	金 額
会 費	13,000,000	刊 行 費	5,300,000
雑 誌 売 上	500,000	発 送 費	600,000
科学研究費補助金	3,800,000	事 務 委 託 費	4,284,000
科学研究費補助金利息	0	大 会 関 係 費	4,500,000
預 金 金 利	2,000	評 議 員 会 費	300,000
大会関係収入	1,600,000	常 任 委 員 会 費	800,000
広 告 料	250,000	編 集 委 員 会 費	1,400,000
雑 収 入	0	大会運営委員会費	900,000
雑 益	0	広 報 委 員 会 費	1,500,000
基金からの繰入	3,200,000	夏 期 講 座 委 員 会 費	200,000
夏期講座準備費返納	0	事 務 局 費	1,600,000
		学 会 賞 費	400,000
		多 様 性 プ ロ ジ ェ ク ト (公 募 型) 費	500,000
		夏 期 講 座 経 費	1,200,000
		言 語 系 学 会 連 合 費	150,000
		C I P L 負 担 金	120,000
		C I P L 言 語 学 文 献 一 覧 編 集 補 助 費	200,000
		通 信 費	700,000
		消 耗 品 費	400,000
		雑 費	100,000
		名 簿 作 成 費	2,400,000
		選 挙 関 係 費	900,000
		学 会 賞 小 委 員 会 費	700,000
		予 備 費	1,013,600
		(基 金 へ の 繰 入)	
		名 簿 作 成 積 立 金	0
		選 挙 関 係 積 立 金	0
		多 様 性 プ ロ ジ ェ ク ト (公 募 型) 積 立 金	500,000
		夏 期 講 座 積 立 金	0
		京 都 銀 行 定 期 (過 年 度 分 預 け 替 え)	0
収 入 合 計	22,352,000	支 出 合 計	30,667,600
前 期 繰 越 金	8,315,600	収 支 差 額 (次 期 繰 越 金)	0
合 計	30,667,600	合 計	30,667,600

【別記】 執筆要項の改訂

(旧)

3 原稿の様式と提出方法：

[中略]

- b. 原稿は A4 判用紙，上下左右に 2.5cm のマージンを取り，12 ポイント文字で 1 頁に 25 行横書きで書く。図，表，文献等を含め，邦文論文・欧文論文ともに，40 頁以内（邦文の場合，400 字詰原稿用紙 90 枚程度，欧文の場合，15,000 語程度に相当），フォーラム欄用原稿は同じく 15 頁以内，書評論文は 20 頁以内，書評・紹介は 10 頁以内。上記制限枚数を越えた原稿は編集委員会で圧縮を要求することがある。

[中略]

4 特殊文字ならびに日本語のローマ字化：

[中略]

- a. 例文については訓令式を用いる。
例 zibun（自分），bunpoo もしくは bupō（文法）
- b. 参考文献（欄）については下記の①～③を除き，ヘボン式を用いる。
例 Kindaichi（金田一），…ni tsuite（…について）
- ①固有名詞については，慣例に従う。
例 Gengo Kenkyu（『言語研究』），Takesi Sibata（柴田武），S.-Y. Kuroda（黒田成幸），Mamoru Saito（斎藤衛），Kurosio（くろしお出版），Hituzi Syobo（ひつじ書房），Tokyo（東京）[地名]，Osaka（大阪）[地名]
- ②撥音の「ん」には一貫して n を用いる。
例 bunpoo（文法），onbin（音便）
- ③長音は固有名詞の場合には母音字の上に横棒（マクロン）を付し，固有名詞以外ではマクロンを用いた表記か，同じ母音字を続けて書く表記を用いる。
例 Ono（小野），Ōno（大野），Satō（佐藤）
hoogen, hōgen（方言），kenkyuu, kenkyū（研究）

5 例文表記：

[中略]

- (1) ba naashnish.
for him I work
'I work for him.'

[中略]

- (3) b-a naa-sh-nish.
3 目的-受益 副詞-1 単主語-働く
「私は彼のために働く。」

[中略]

(新)

3 原稿の様式と提出方法：

[中略]

- b. 原稿は A4 判用紙，上下左右に 2.5cm のマージンをとり，図表や例文を含まない 1 頁が約 900 字（邦文），あるいは約 350 語（欧文）になるように書式を調整した上で，図表，文献等を含め，邦文論文・欧文論文ともに 40 頁以内，フォーラム欄用原稿は同じく 15 頁以内，書評論文は 20 頁以内，書評・紹介は 10 頁以内とする。この指示に従っていない原稿は，原則として受領しない。

[中略]

4 特殊文字ならびに日本語のローマ字化：

[中略]

- a. 例文については原則として訓令式を用いる。
例 zibun（自分），bunpoo もしくは bupō（文法）
- b. 参考文献（欄）の固有名詞以外については下記の①，②を除き，ヘボン式あるいは訓令式を一貫して用いる。
例 …ni tsuite または …ni tuite（…について）
①撥音の「ん」には一貫して n を用いる。
例 bunpoo（文法），onbin（音便）
②長音は，母音字の上に横棒（マクロン）を付す表記か，同じ母音字を続けて書く表記のいずれかを一貫して用いる。
例 hoogen, hōgen（方言），kenkyuu, kenkyū（研究）
- c. 参考文献（欄）の固有名詞については，慣例，または本人の表記に従う。
例 Gengo Kenkyu（『言語研究』），Takesi Sibata（柴田武），S.-Y. Kuroda（黒田成幸），Mamoru Saito（斎藤衛），Shirō Hattori（服部四郎），Kurosio（くろしお出版），Hituzi Syobo（ひつじ書房），Tokyo（東京）[地名]，Osaka（大阪）[地名]
慣例が定まっていない固有名詞や本人の表記が不明な人名については，上記の b（固有名詞以外の場合）に準ずる。

5 例文表記：

[中略]

- (1) ba naashnish.
for.him I.work (for:him,I:work も可)
'I work for him.'

[中略]

- (3) b-a naa-sh-nish.
3目的-受益 副詞-1単主語-働く
「私は彼のために働く。」

[中略]

6 注および参考文献：

[中略]

- a. 項目は第1著者のアルファベット順に並べる。

[中略]

- d. 同一の単行本から複数の論文が引用されている場合には、単行本を編者名による1つの項目として立て、各論文はそこへの参照とする。

[中略]

- f. 各項には、著（編）者名、発行年、論文名、頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

[中略]

[論集などに所収の論文]

[中略]

- 例 金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727
749. 東京：研究社。

[中略]

[単行本]

[中略]

- 例 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京：大修館書店。

[中略]

[学位論文]

[中略]

- 例 南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文. 南西大学.

[中略]

6 注および参考文献：

[中略]

- a. 項目は第1著者のアルファベット順に並べる。ただし、言語ごとに分け、当該言語の慣例的な配列順に従ってもよい。

[中略]

- d. 同一の単行本（論文集）から複数の論文が引用されている場合には、単行本を編者名による1つの項目として立て、各論文はそこへの参照とする。

[中略]

- f. 欧文で複数著者（あるいは編者）の場合、著（編）者名は、「第1著者の姓、第1著者の名（、第2著者の名 第2著者の姓、…）and 最終著者の名 最終著者の姓」のように並べる。なお、英語以外の言語で書かれた文献の場合、andの代わりに、それぞれの言語で and に相当する等位接続詞を用いてもかまわない。また、さまざまな言語の等位接続詞を使い分ける代わりに、言語に関係なく一貫して & を用いてもかまわない。

- g. 各項には、著（編）者名、発行年、論文名、頁等を以下（句読点も含む）に準じて記載する。

[中略]

[論集などに所収の論文]

[中略]

- 例 金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説 下』727-749. 東京：研究社。

[中略]

[単行本]

[中略]

- 例 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析：生成文法の方法』東京：大修館書店。

[中略]

[学位論文]

[中略]

- 例 梶茂樹 (1992) 「テンボ語音韻論：その共時態と通時態」博士論文、京都大学。

[中略]

[研究発表] 発表者名（発表年）「発表題目」発表学会名および発表の種別、会場、発表年月日。

- 例 橋本萬大郎 (1966) 「文法構造の関係概念と範疇概念」日本言語学会第55回大会口頭発表。京都大学、1966年10月16日。

- 例 Liberman, Mark (2007) The future of linguistics. Invited plenary address at the 81st Annual Meeting of the Linguistic Society of America. Hilton Anaheim, 6 January 2007.

[ウェブサイト] 著者名（発表年）「サイト名」URL [アクセス年月]. (発表年不明の場合省略可)

- 例 文化庁「平成24年度「国語に関する世論調査」の結果について」http://www.bunka.go.jp/kokugo_nihongo/yoronchousa/h24/pdf/h24_chosa_kekka.pdf [2014年6月アクセス].

- 例 Lewis, M. Paul, Gary F. Simons and Charles D. Fennig (eds.) (2014) Ethnologue: Languages of the world, seventeenth edition, online version. <http://www.ethnologue.com> [accessed June 2014].

[中略]

- ・ 邦文で執筆された単行本、論文を欧文論文で引用する場合は、上記の欧文文献の表記に準ずることとする。また、書名、論文名にはできるだけ訳語をつける。

例 Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron*. [*Japanese grammar*]. Tokyo: Hōbunkan.

例 Kuroda, S.-Y. (1980) *Bunpoo no hikaku*. [*Comparison between Japanese and English grammar*]. In: Tetsuya Kunihiro (ed.) *Nichieigo hikaku kooza 2: Bunpoo*. [*Comparative studies of Japanese and English 2: Grammar*], 23–62. Tokyo: Taishukan.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

参照文献

Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt.

Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell.

服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2–14.

Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press.

金田一京助 (1932) 『国語音韻論』東京：刀江書院。

金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎（編）『世界言語概説』下：727–749. 東京：研究社。

Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Emmon Bach and Robert T. Harms (eds.) *Universals in linguistic theory*, 171–202. New York: Holt, Rinehart and Winston.

Lakoff, George (1986a) *Women, fire and dangerous things: What categories reveal about the mind*. Chicago: University of Chicago Press.

Lakoff, George (1986b) Cognitive semantics. Berkeley Cognitive Science Report 36.

Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press.

- ・邦文で執筆された単行本，論文を欧文論文で引用する場合は，上記の欧文文献の表記に準ずることとする。また，書名，論文名にはできるだけ訳語をつける。

例 Yamada, Yoshio (1908) *Nihon bunpoo-ron* [*Japanese grammar*]. Tokyo: Hōbunkan.

例 Kuroda, S.-Y. (1980) *Bunpoo no hikaku* [*Comparison between Japanese and English grammar*]. In: Tetsuya Kunihiro (ed.) *Nichieigo hikaku kooza 2: Bunpoo* [*Comparative studies of Japanese and English 2: Grammar*], 23–62. Tokyo: Taishukan.

以下にアルファベット順に配列した例を示す。

参照文献

- Bach, Emmon (1968) Nouns and noun phrases. In: Bach and Harms (1968), 90–122. 【同一論集に所収の複数の論文】
- Bach, Emmon and Robert T. Harms (eds.) (1968) *Universals in linguistic theory*. New York: Holt, Rinehart and Winston. 【論文を所収する論集】
- Bloomfield, Leonard (1933) *Language*. New York: Holt. 【単行本】
- Frey, Werner and Karin Pittner (1998) Zur Positionierung von Adverbien. *Linguistische Berichte* 176: 489–534. [Frey, Werner & Karin Pittner (1998) … のように & を参照文献 (欄) で一貫して用いてもよい] 【複数著者による英語以外の欧文論文】
- Haegeman, Liliane (1994) *Introduction to government and binding theory*. Second edition. Oxford: Basil Blackwell. 【単行本】
- 服部四郎 (1976) 「上代日本語の母音体系と母音調和」『言語』5(6): 2–14. 【論文】
- 平山輝男・大島一郎・中本正智 (1966) 『琉球方言の総合的研究』東京：明治書院。【複数著者による単行本】
- Jakobson, Roman, Gunnar Fant and Morris Halle (1963) *Preliminaries to speech analysis: The distinctive features and their correlates*. Cambridge, MA: MIT Press. 【複数著者による単行本】
- 梶茂樹 (1992) 「テンボ語音韻論：その共時態と通時態」博士論文，京都大学。【学位論文】
- 金田一京助 (1932) 『国語音韻論』東京：刀江書院。【単行本】
- 金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎 (編) 『世界言語概説 下』727–749. 東京：研究社。【事典等の項目】
- Kiparsky, Paul (1968) Linguistic universals and linguistic change. In: Bach and Harms (1968), 171–202. 【同一論集に所収の複数の論文】
- Lakoff, George and Mark Johnson (1980) *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press. 【複数著者による単行本】

南西太郎 (2005) 「南西語音韻論研究」博士論文, 南西大学.

Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37–120.

Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT.

佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』9: 1–16.

柴谷方良 (1978) 『日本語の分析』東京：大修館書店.

Trubetzkoy, N.S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

- ・本文および注における参考文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

[中略]

例 Sapir (1925) notes that…

[中略]

(2011年11月改訂)

- Langacker, Ronald W. (1993a) Grammatical traces of some “invisible” semantic constructs. *Language Sciences* 15: 323–55. 【同一著者による同一年の複数の文献】
- Langacker, Ronald W. (1993b) Reference-point constructions. *Cognitive Linguistics* 4: 1–38. 【同上】
- Postal, Paul (1970) On the surface verb “remind”. *Linguistic Inquiry* 1: 37–120. 【論文】
- Sag, Ivan (1976) Deletion and logical form. Unpublished doctoral dissertation, MIT. 【学位論文】
- 佐久間鼎 (1941) 「構文と文脈」『言語研究』9: 1–16. 【論文】
- Scalise, Sergio, Antonio Fábregas and Francesca Forza (2009) Exocentricity in compounding. *Gengo Kenkyu* 135: 49–84. 【複数著者による論文】
- 柴谷方良 (1978) 『日本語の分析：生成文法の方法』東京：大修館書店. 【単行本】
- Trubetzkoy, N.S. (1971) *Grundzüge der Phonologie*. 5. Auflage. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. 【単行本】

・本文および注における参考文献への言及は以下の要領に準じて行う。必要に応じて著者名をフルネームで記してもよい。

[中略]

例 ……の研究には平山ほか (1966) がある。

例 Sapir (1925) notes that…

例 As pointed out by Scalise et al. (2009: 50),…

[中略]

(2014年6月改訂)

第 148 回大会

期日 2014年6月7日(土)・6月8日(日)

会場 法政大学

公開シンポジウム 6月8日(日) 13:40～16:50

「過去のコミュニケーションを復元する

—書き言葉と話し言葉をめぐる三都物語—

司会：尾谷 昌則

- | | | |
|-------|--|-------|
| (S 1) | 話し言葉を書く, 書き言葉を読む—江戸人たちの言葉の世界 | 田中 優子 |
| (S 2) | 1800年前後のベルリンにおける標準文章語と方言の混交
—緩衝材としての「日常語」 | 高田 博行 |
| (S 3) | 「話された書き言葉」と「書かれた話し言葉」
—近代英語期ロンドンの言語意識 | 椎名 美智 |
| (S 4) | 過去のコミュニケーションを詮索する快樂—歴史語用論という箱眼鏡 | 滝浦 真人 |

口頭発表

—第1日(6月7日(土)) 13:00～17:40—

。A会場

- | | | | |
|-------|--------|--|-----------------------|
| (A 1) | 13:00～ | 1人称心理文の非ノダ文/ノダ文に対する聞き手の認知—話者に属する情報について聞き手に反応を求める場合— | 京野 千穂
堀江 薫 |
| (A 2) | 13:40～ | 〈許可〉・〈禁止〉を表わす日本語の可能表現について | 林 青樺 |
| (A 3) | 14:20～ | アイロニー発話の誤解と乖離的態度の解釈 | 盛田 有貴 |
| (A 4) | 15:00～ | 韓国語・英語副詞の心的距離分析 | 高 雅妃 |
| (A 5) | 15:50～ | ガグテアル構文を動機づける「発見性」について | 高島 彬 |
| (A 6) | 16:30～ | 日中改善要求表現に見られる事態認識の様式 | 李 国玲 |
| (A 7) | 17:10～ | Emotional discourse analysis: an attempt at contrastive analysis of Japanese literary translations | Holoborodko Alexandra |

。B会場

- | | | | |
|-------|--------|--|--|
| (B 1) | 13:00～ | The Effect of the Choice of the Objects in Japanese Locative Alternation | Natsuno Aoki |
| (B 2) | 13:40～ | will be P 構文 | 平沢 慎也 |
| (B 3) | 14:20～ | VN型漢語動詞に対する検討—「N+を+VNする」型表現を例に— | 程 莉 |
| (B 4) | 15:00～ | ホドを用いた因果表現の解釈と構造 | 東寺 祐亮 |
| (B 5) | 15:50～ | Chinese relative clause processing by native Chinese speakers: An eye-tracking study | Michael Patrick
Mansbridge
Kexin Xiong
Katsuo Tamaoka |
| (B 6) | 16:30～ | 日本語分裂文のERP研究—使役形を用いた検討— | 矢野 雅貴
立山 憂
坂本 勉 |
| (B 7) | 17:10～ | fMRIを使用した日本語の格助詞の処理に関わる脳活動報告 | 上田由紀子
橋本 洋輔
中村 和浩
内堀 朝子 |

。 C 会場

- (C 1) 13:00 ~ 日本語の空項に関する研究：不動要素の観点から 坂本 祐太
 (C 2) 13:40 ~ アスペクトを用いた日本語における結果構文の統語的 山口 真史
 研究
 (C 3) 14:20 ~ 補文からの繰り上げ—一致に基づくアプローチ vs. 大高 茜
 labeling algorithm に基づくアプローチ
 (C 4) 15:00 ~ 日本語の引き剥がし構文と島の制約修復について 向 明栄茂
 (C 5) 15:50 ~ Toward a classification of *de*-phrases in Japanese Kaori Miura
 (C 6) 16:30 ~ Puzzles with the subject position in Irish Dónall P. Ó BAOILL
 Hideki MAKI
 (C 7) 17:10 ~ On the absence of the wh-island effect in modern Inner Lina BAO
 Mongolian Shogo TOKUGAWA
 Megumi HASEBE
 Hideki MAKI

。 D 会場

- (D 1) 13:00 ~ 上海語変調におけるピッチ下降の音韻特性：実験音韻 高橋 康德
 論的考察
 (D 2) 13:40 ~ アイスランド語ストレスアクセント試論 三村 竜之
 (D 3) 14:20 ~ 日本語の複合語におけるアクセント移動は言語構造に 松浦 年男
 によるものか？
 (D 4) 15:00 ~ Lexical-specific or rule-based *rendaku* by native Chinese Katsuo Tamaoka
 and Korean speakers learning Japanese Kyoko Hayakawa
 Timothy John Vance
 (D 5) 15:50 ~ 統語的複合動詞の獲得—CHILDES を使用した実証研 木戸 康人
 究—
 (D 6) 16:30 ~ 日本人英語学習者の文産出における主語動詞一致誘引 遊佐麻友子
 金 情浩
 小泉 政利
 (D 7) 17:10 ~ 情報の流れが日本語のかき混ぜ文理解に与える影響： 鈴木 孝明
 幼児と成人母語話者の比較

。 E 会場

- (E 1) 13:00 ~ 近代日本語書き言葉の主語標示助詞使い分け—視覚準 廉田 浩
 拠モデルによる各助詞使用頻度分布の解釈—
 (E 2) 13:40 ~ Anticausatives and *Ar*-intransitives in Kesen Fumikazu Niinuma
 (E 3) 14:20 ~ 日本語の「- おく」における史的変遷 一色 舞子
 (E 4) 15:00 ~ 係り結びがもたらす疑問助詞の分布制約—日本語史と 衣畑 智秀
 琉球語から—
 (E 5) 15:50 ~ スキーマを用いたノダの多義構造分析 笠井 陽介
 (E 6) 16:30 ~ 発話伝達のモーダル形式と日本語の授受動詞の周位的 長谷部郁子
 用法
 (E 7) 17:10 ~ 容認性判断実験に基づく日本語複数名詞の意味の考察 野元 裕樹

。 F 会場

- (F 1) 13:00 ~ ハワイ語「方向詞」に関する数的分布 岩崎加奈絵

- (F 2) 13:40 ~ イロカノ語バギオ方言における移動動詞を含む動詞連続構文 山本 恭裕
- (F 3) 14:20 ~ The search for the “Lost” Auxiliaries: Motion clauses and imperfective aspect in Kalanguya, Northern Philippines Paul Julian SANTIAGO
- (F 4) 15:00 ~ タガログ語の pa- 形 長屋 尚典
- (F 5) 15:50 ~ アショー・チン語における人称標示と inverse marker *mā-* 大塚 行誠
- (F 6) 16:30 ~ ラワン語の再帰接辞 -shi に関する一考察 大西 秀幸
- (F 7) 17:10 ~ チャイレル語の系統再考 藤原 敬介
- 。G 会場
- (G 1) 13:00 ~ ウズベク語における欠如を表す形容詞派生接辞 -siz について 日高 晋介
- (G 2) 13:40 ~ モンゴル語の否定小辞の自立度 梅谷 博之
- (G 3) 14:20 ~ ブルシャスキー語の動詞の連体修飾構造 吉岡 乾
- (G 4) 15:00 ~ オリヤ語の複合述語にかかる人称制限 山部 順治
- (G 5) 15:50 ~ アルタイ諸語における文法化の段階的分布—「知る」に由来する可能表現から— 山崎 雅人
- (G 6) 16:30 ~ 現代朝鮮語の「言いさし」における節の構造とモダリティの関係について 黒島 規史
- (G 7) 17:10 ~ 接辞・接語・複合の左右非対称性：統一的理解に向けて 浅尾 仁彦
- 。H 会場
- (H 1) 13:00 ~ アラビア語の *al-maf'ūl li-'ajl-i-bi* (object of cause) の再考察 松尾 愛
イハブ・アハマド・エベード
- (H 2) 13:40 ~ ベンデ語 (タンザニア, バントゥ F12) の持続相標示 阿部 優子
sí-/syá-
- (H 3) 14:20 ~ アッレ語の分析を通じた動詞枠付け言語の低位分類に関する一考察 吉野 宏志
- (H 4) 15:00 ~ コプト・エジプト語の他動詞の「前名詞形」の軽動詞性と文法化 宮川 創
- (H 5) 15:50 ~ 日本語動詞アクセントにおける活用形間対応制約の役割 クレメンス・ポッベ
- (H 6) 16:30 ~ 奄美喜界島小野津方言の一人称代名詞の複数形 白田 理人
- (H 7) 17:10 ~ 間接疑問文と「補文性」—佐賀方言の疑問標識を例に— 日高 俊夫

ワークショップ

—第2日 (6月8日 (日)) 10:00 ~ 12:00—

ワークショップ1 (外濠校舎 S406 教室)

- (W 1) 名詞化とその周辺に存在する諸問題 企画：大西 秀幸
—Malchukov (2006) の枠組みをもとにして— 司会：吉岡 乾
コメンテーター：風間伸次郎
- (W 1-1) ウズベク語の動作名詞について 日高 晋介
- (W 1-2) ブルシャスキー語の希求法不定詞とは何か 吉岡 乾
- (W 1-3) ラワン語における名詞節+コピュラ構文 大西 秀幸
- (W 1-4) モンゴル語の形動詞接辞 -rɣ —共時的な使用実態から— 山田 洋平

(W 1-5) ニヴフ語のゼロ名詞化について—間接疑問表現を中心に—

蔡 熙鏡

ワークショップ2 (外濠校舎 S407 教室)

(W 2) 他動性の本質の解明

企画：パルデシ・ブラシャント

—日本語と世界諸言語の対照研究から見えてくるもの

司会：影山 太郎

コメンテーター：佐々木 冠

(W 2-1) 日本語と世界諸言語の対照研究から見えてくるもの

桐生 和幸

(W 2-2) 自他動詞の類型論：認知的な説明から頻度に基づく説明へ

ナロック・ハイコ

(W 2-3) 有対自他動詞の地理類型論的なデータベース：

パルデシ・ブラシャント

類型論的なパターン可視化および仮説の検証

ポスター発表

—第2日 (6月8日(日)) 11:30 ~ 12:50 (外濠校舎7階薩埵ホールロビー)—

(P 1) 日英語における島の効果の実験的記述と比較

時本 真吾

(P 2) 沖縄語首里方言の語頭声門破裂音の機能負担量

花蘭 悟

(P 3) 語形成に関わる OCP 原則の役割について

西原 哲雄

(P 4) 選択疑問文の分析～英語, 中国語, 日本語の比較から

伊藤さとみ

◇退 会

国内通常会員：57名

国内維持会員：2名

国内学生会員：3名

国内団体会員：2件

在外通常会員：1名

65名



◇本学会の評議員である坂本勉氏は、2014年7月23日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

◇本学会の委員（現評議員）を務められた湯川恭敏氏は、2014年8月25日に逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。